

二言、三言、世迷い言(十二)

宗内 敦

(1) 誰の命も大切に

この頃、命の重さ、大切さを考えさせる大きな記事や出来事が相次いだ。

13日、弁護士から最高裁判事に就いた大橋正治氏が記者会見で、「一つ一つの事件を誠実に扱っていきたい」と抱負を述べた。げに、「ごもっとも。だからこそ、このほど(2月20日)、まっとうな情理をもって人の世を慈しむ普通の人なら到底許し難く、国民誰もが死刑を逃れさせ

るわけにはいかないと考えた、あの残酷この上ない「光市母子殺害事件」の犯人の最終抗告審で上告棄却を決めた最高裁第一小法廷でも、一人の裁判官がなお「死刑回避の事情なしとしない」として死刑反対意見を述べている。人や組織が人の命に関わり預かるべき、幾重にも幾重にも、このように慎重かつ誠実に臨むのは、けだし当然である。

ちょうど、これと相前後して、天皇陛下の心臓バイパス手術が、それこそ幾重にも幾重にも安全を配慮した組織的な医

療計画の中で、成功裏に終わった。国民の一人として、真に喜ばしい。これは単に、患者が国民の多くが敬愛する天皇陛下であるからだけでなく、国民の「象徴」たる天皇に対する施術行為が、すべての国民にもかくあるべしとの最高の医療モデルを「象徴的」に示したことにもなるからでもある。このこと、ここで敢えて強調するのは、医療はなべて、国民すべてにかくあらねばならないはずなのに、実際の医療の現状は、その理念からあまりに遠く隔てているからである。

恐れ多くも、陛下と全く同じ冠動脈の硬化があつて、一昨年、陛下が術前に受けたものと全く同じ心臓カテーテル検査を、さる医療機関で受けた(1泊2日)。そこは、生体肝移植を受ける幾人もの重症患者に対し手術前に高額な「寄付金」の提供を行わたということで一躍悪名を馳せた医療施設だが、近くの医院の紹介でやむなく行ったものであつた……、が、まことに粗末、驚きと怒りの連続

だつた。少し中味をあげてみると、予定時間が来て、急用が入つた、急患が入つたなどの理由で待たされること2時間、せわしなく検査開始。開始後まもなく、どんな処置をし忘れたのか、「あつ、忘れてた」という担当医師によるとさに漏れた慌て声。検査台の上で、どんな医療ミスが起きるのか、死さえも思い浮かべるほどの不安に落ちた。

検査終了後その若い担当医師曰く、冠動脈が一本完全に詰まっているから、すぐにもステントを入れるカテーテル治療をしないと命が危ないと脅迫的態度。

翌朝、検査後のCT検査等の結果、脳に血栓が飛んで脳梗塞の発症が判明。少し口元が歪みかけている。このまま口元がゆがんだらどうするのかの質問に対し、「リハビリするよ」と何の惑いもない返事。

結局、この若い医師にとって、こちらは腕を磨く格好の患者以外の何者でもな

かつたわけだが、さてこの問題はいずれきちんと文章上で精算するとして、一体、医師というものが、どうしてあかも不遜でいられるのだろうか。たまたま、陛下のニュースの合間を縫うようにして、ゴルフを続けるために前立腺がんの手術を拒否し、昨年末に苦しみの中で亡くなったゴルフの杉原輝男氏の受診場面が放映されたが、これも驚きである。その医師の姿は写されなかつたが、その横柄な態度には言葉もない。

「痛い?」と問うて、杉原氏がうなずき返すと、「ああ、そうだろうね」。テレビカメラが入っているというのに、この無礼で乱暴な言葉遣い。丁寧語一つ使えないのか。こんな医療現場の有様だから、どうせ死期は誰にもくるからと、医者の不遜に身をゆだねることなく、死を迎える人も出るのだろう。その人柄についてはけつして好意を持つことは出来なかつたが、脚本家の故和田勉氏もその一人かもしれない。氏は、食道上皮がんと診断

されても、手術や延命治療を行わず、みずから選んで、苦しみの闘病生活の末を自然死で終えている。真似したくとも自分にはできないと、痛く感動させられた。元内閣総理大臣・田中角栄氏は脳梗塞で倒れ、政界を引いた。その角栄氏がリハビリ施設で、「田中さん」と呼ばれ、単なる無力の老人として余りに軽々無残な取り扱いを受ける様を見て、見舞いに訪れた娘の田中真紀子氏が激怒し、早速にも引き取り、困難なりハビリを自宅で行うに至つた。これも感動の話である。

達観して自然死を迎える、あるいは自らの力で、介護の環境を整える。そうありたいものである。が、誰もが皆、力強く、経済的にも恵まれてるわけではない。特別な人しか、思うような人生の終末を迎えることができないのも事実である。冷やかな医療現場に大きな不満を漏らしつつ、しかしあきらめの境地で次の世に旅立っていった友人の言葉が、昨日のこのように思い出される。「医者

や看護師がどんなに低劣な人間であつても、その世話になることなく死んでいくことは、結局できないんだよね。」

此度の東日本大震災の最中に、人命救助に献身する医師・看護師の姿に感動もした。しかし、医療現場の底辺には、こつした切ないまでに悲しい無残な現実もまた、存在しているのである。遠くは娘に『二言、三言、世迷い言』p115)、近くは私に、命こそ奪われなかつたが、生体実験的無謀医療を体験した身からは、思わず、誰の命も大切に、と声を漏らすのである。

(12・2・21)
ネット訪問者の拍手。

(2) 真善美への遷流

長く黒い霧に囲まれ続けながら、政界のドンたり続けている小沢一郎氏に対する「検察審査会」による政治資金問題についての強制起訴事件の東京地裁判決が出た。その「無罪」判決が、消費税問題

を背景にした復党問題と絡んで大騒ぎ。結果が白だから復党よし、まだ最終審ではないから駄目、云々。と、与野党合わせて姦しい。今さらながらの、この醜い政争劇……。それにしても、一体、裁判結果なるものがどんな意味があるのだろうか。

醜いものも多いが、美しいものもまた、この世の中にはたくさんある。とりわけ無垢なる子どもの世界には満ちあふれている。

過日、散歩の帰り道、いつもの公園を通り抜けようとしたとき、母親に付き添われてブランコを漕いでいた3、4歳の男の児が、空中一番高いところから、大きな声で「こんにちわ」と言いながら手を振って来た。心楽しく、こちらもまた大きな声で「こんにちわ」と応じた。すると幼児が、またまた大きな声で、言うのである。私に向けて、「カウボーイみたい!」。「格好いい」と感嘆の声を上

げ、脇の母親もまたうなずいている。短足胴長にして小太りの私はおよそスマートとはほど遠い体型であるが、編み目に入った中折れのフェルト帽をかぶり、縦縞のスポーツシャツとストライプの粋なズボンをつり革でつった当日のスタイルは、出がけに、近所の老婦人から、「格好いい」と世辞を言われて、ずつと胸を張って歩いていたものではあつたが……

それにしても、純なるおさな児の、このなんたる正直な心の発露。この子が、いやいや、子どもというものが、どんなに邪念のない善なる心性を持つているものが、つくづく嬉しくなつて、私は思わず、右手をピストルの構えに変え、「バン、バン」と空砲を撃つて、手を打ち振る母子との別れの合図とはしたものである。

一昨日、中央線東京行き特別快速電車の中で、うつらうつらとするうちに、前に立っていた人が下車して前が明るみ、ふつと意識が戻つた。と、対面する側の席に、中学生とおぼしき少女が慎ましや

かに座つて、母親だろうか姉だろうか、隣に座る和居合い女性と時折会話を交わす姿が目に入った。見るともなしに見やるうち、なんとということ、私はたちまちその少女に魅入られた。身なり質素なズボン姿、少女はシートにもたせた背筋をまつすく伸ばし、おなかのあたりに両手を重ね、きちんと合わせた両足の上に視線を落として、ほとんど微動だにしない。動きを見せるのは、隣と話を合わせるときだけ、顔をすこし相手の方に傾けて、緩やかに静から動への揺らめきを見せるだけである。そして、身体全体に緊張感などどこにもない。この自然体、腰掛け座像のなんと美しいこと。それは、教えられた、あるいは型にはめられた所作ではなく、すくすく育つた人性がそのまま具現化した、まさしく自然に培われた気品とも言うべきか。どんなに美しい写真や動画の中のモデルたちも、到底及ぶところでは全くない。やがて少女は下車していったが、伸びやかな背筋で緩やか

に歩む姿もまた、格別だった。まだ少女とは言え、得も言われぬ、女人像を見て、余韻の中で、その一日、心和やかだった。

まさしく、美しいものは無垢なる子どもの世界には満ちあふれている。我が身も含め、これがどうして汚れた道筋をたどるようになっていくのだろうか。

一年有余、愛読してきた「日経」朝刊連載小説「長谷川等伯」(作・安部龍太郎、画・西のぼる)が終わった。戦国時代末期、苦闘の末、狩野派との血みどろの戦いを経て、人間的にも成長しながら、新しい画流・長谷川派を確立した長谷川等伯の物語である。作者はその中で、これまた苦難の末に戦国武将との様々な確執を乗り越えて生き抜いた、権謀術策の公家・龍山公(近衛正久)を登場させ、苦悩する等伯を論じて曰く、「ええか、信春、俺ら政(まつりごと)にたずさわる者(もん)は、信念のために嘘をつく。

時には人をだまし、陥れ、裏切ることもある。だが、それでええと思とる訳やない。そやし常しえの真善美を乞い求め、心の底から打ち震わしてくれるのを待つとるんや」と語らせている。けれど、名言である。作者は龍山公の口を借りて、迷える等伯の人と画業にそれ(真善美)を求める説教としながら、この小説の主題を語り、また、現下の世情や政情に大きな戒めを発しているのではなからうか。

「信念に基づく」という格好のよい言葉がある。が、その底にはたくさん悪をも含め潜ませており、およそ人の行動基準とはなり得ないものである。裁判における判断もまた、しかし。それは所詮、様々な力や条件の力学的な妥協の結果に過ぎないからである。私たちが基づくものは、そのような悪しき物事との関わりを持たぬ純粹無垢なるものから発する真善美の世界でなくてはならぬ。誰もがみな無垢なるときに持っていた「真善美」

思えば、なでしこジャパンの選手たち、まことにもってアスリートの鑑である。その真髄は、真に一致団結のもと死力を尽くして戦う姿の中にだけあるのではなく、戦果を上げた試合後のメッセージの中にこそある。昨年、W杯優勝後の選手インタビューで丸山桂里奈選手が、「震災被災者の皆さんの復興に向かう姿に力を与えてもらった」と述べて人々を感銘させたが、その他の選手たちもみな謙虚で味わい深いコメントだった。かくして、なでしこジャパンはまさに国民と一体化したスポーツ軍団であり、この態様が続く限り、彼女たちが名実ともに世界一に輝く日がきつと来る。アスリートたちよ、もって鑑として欲しい。(12・8・08)

ネット訪問者の拍手5

(5) たかがスポーツ、されどスポーツ
稀勢の里に、「大和男の子」を期待する

大相撲秋場所、大関・日馬富士が07年

夏場所の白鵬以来という連続優勝を遂げて横綱昇進を確実にした。日本人よりもさらにより日本人らしい「ヤマト魂」を持つ人物と思いい、密かに応援してくる事を望んではいたが、その優勝イ¥ンタビューには失望した。やはり言葉のようにな、「お世話になった人たちへの感謝」といったような決まり文句よりも先に、まさに「この躰を与えてくれた先祖・両親に感謝したい」には感銘したが、次いで出てきた「今後も皆さんに、感動や勇気や希望を与える相撲を取っていきたい」という無自覚な決まり文句には、煮え湯を飲まされたような不快感を食らわされた。もしかすると、誰かが下ごしらえした決まり文句を棒読みしたのかも知れないが、これは己を謙虚に内から律して毫も動じない「ヤマト魂」とはあまりに違はずいずい。せつかくの優勝劇だったが、所詮、「たかがスポーツ、されどスポーツ」と思っほかないように思われるのは、いささか残念である。

それにしても、日本力士たちの不甲斐なさには、たかがスポーツなれども、歯ぎしりする。そもそも、いつしか日馬富士に肩入れするようになったのは、「ヤマト魂」を忘れた感のある日本人有望力士たちのだらしなさにあるのだが、その最たる者は、稀勢の里だろう。今のままでは、彼はけっして横綱にはなれないだろうし、それどころか、大関陥落だつてあり得ないことではけっしてない。その理由、

太りすぎている。食べ過ぎの上、稽古不足である。結果、技能不足に陥っている。
立合い前の血気盛んの未熟さ。気力や血気、いわばうわへの闘争心だけで相手を圧倒できると思う愚かさ。かえって躰が硬くなって、立合いに隙間も出来る。試合は、勝負を越えて自分の相撲を全うする全霊をかけた型でするもの。かつての横綱・貴乃花を思うべし。
突き押しはたき、そして張り手もや

めて、四つ相撲に徹すべし。体力で圧倒できる相手に突き押しして勝つのは誰にでも出来る。組んで押して、それで負ければ、やがて体力に勝る相手に優れる業も身につく。これも、体力絶倫の曙・武蔵丸に伍し、さらにこれを凌駕していった、かの貴乃花に学べし。

結論として、上滑りになって、心技体、せつかくの素質を活かす真のヤマト心が欠如している。

たかが角力、されど日本の伝統文化。
真の大和男の子こそ見たいものだ。

(12・9・23)

ネット訪問者の拍手6

(6) 麻薬的体罰教育から脱しよう！

教育・指導の世界における体罰、常に古くて新しい話題である。このたび、オリンピック代表者を含む女子柔道選手らの憤懣やる方のない声が明るみに出て、

にわかにマスコミ・世間がかまびすしい。関連する内容がありそうとて、ネット上で私の『教師の権威と指導力』に触れたカメラマン同伴で訪ねてきた。いつか年も越え、このせつかくのブログ欄とも無沙汰が長くなっている。書いてみたいことは山ほどあつても、30年前に出した『ケースワークと権威』なる翻訳英書の再販に向けて必死の改訂作業が難航し、ここ数ヶ月、何もかも放り捨ててそれに打ち込んでいる最中、とても時間を取れる状況ではなかつたが、興味深いテーマでもあり、否それどころか、「カラー・ピラミッド・テスト」の研究と並んで、私の最も関心を寄せる、即ち「権威」の問題とも大いに関連する話題だとも思ひ、応じたものである。

テレビでは一分に満たないほどの利用に過ぎないだろう。しかし、記者にも一家言あつて、それは単なるコメント取材に留まらず、意見の交換、議論といった

方向での話し合いになり、いつか2時間近く経過して、教職を引退後久しい身には、ゼミナールの緊張感も漂う楽しく実りのある時間となつた。面談を終えた後、「体罰」問題に関して、様々に整理されている自分に気づき、この欄の話題ともすべく、そのうちの一部を上記テーマで、早速、一文啓上する次第である。

(麻薬的体罰教育から脱しよう！)

教育と指導の方法は、大別すれば、親和と友好に基づく友愛的指導と、体罰を極とするスパルタ教育とに分けられよう。しかし、およそ、教育とか指導というものは、それを受ける側が、指導者を、指導者に足る人物、即ち、教育指導する能力・資格(知識・技能、そして人格)、言い換えれば、「権威」を認めてこそ成り立つものである。そこで、指導者は「権威」ある人物として振舞い、教育・指導を行う。その指導の方法は、現代社会の倫理観のなかでは一般に、初め友愛的関

係である。しかし、誰もが知るように、友愛的接触が必ずしも成果を上げるとは限らない。相手次第で、時には、甘え、自己中心、努力不足、忍耐不足の生徒を作り、指導は失敗する。これはひとつがよく目にし、口にするだけでもある。一定期間に成果を上げることが期待され圧力となっている場合には、指導者は焦る。そこで、つい、上下の力関係のなかで、叱責の果てに手が出て口が出て、暴力が出て…となる。いわゆる体罰である。こうなると、指導者は「権威」にあらずして単なる「権力」者にすぎなくなっている。このとき、もし指導者が、嘘かまことか柔道界のように、体罰的土壌や文化のなかで育てられ、身を立て名を上げてきた場合、それ(体罰)は最も魅力的な指導手がかかりとなり、指導者のやり方は、「友愛的指導」から体罰を極とする、「スパルタ教育」へと変容する。幸か不幸か、たくさん対象者のなかには、その指導者の被教育体験と全く同様にその体罰教

育指導が大きな功を奏し、オリンピック代表者が出たり、有名大学入学者がでたりすることもある。となればまた、体罰教育やスパルタ教育がいかなる相手に有効でいかなる相手には不都合か、こうした問題は意識からはずし、それが現代の倫理観にもとるという気持も次第に薄れ、指導者は体罰教育一色に染まり込んでいく。ちょうど、麻薬患者がひとたび染まるとそこから抜け出ることが難しくなるのと同じ、まさしく、体罰教育は、教育・指導者にとつては、麻薬常習者と同じように、苦悩の果ての一種の麻薬的中毒症状なのである。こう考えると、ひとたび成り立った体罰教育とそれを育て来たった集団文化的背景は、それを取り除くことは容易ではない。また、こうした問題を包括的かつ体系的に考察・分析することも容易ではない。その作業は、いずれ時と所を改めて行うとして、ここでは、今思いつく、体罰教育から脱却する為のヒントのみを

記して取り敢えず終わっておこう。指導者は、たとえ教育効果を上げ得る相手がいる(または居た)としても、体罰教育は暴力容認文化の基をつくる悪徳であると、肝に銘じるべきである。およそ、人に対する教育・指導に関わる者は、すべて暴力を否定し、平和な国家、国民づくりに寄与し、究極の世界平和に貢献する役割・使命を負っている。その根本を忘却してはならない、ということである。この根本を原点に、体罰でも与えなければ効果を上げ得ないと思われる相手には、体罰教育以外の有効な指導方法を見いだすべく、研究に励むこと。これが専門職としての、教育・指導者の役割である。

絵画など、芸術を志向することと同じ感覚でスポーツを愛好し、その粋を極めようと立ち向かっている。こうした多くの対象者に対し、体罰効果が入り込む余地はほとんどない。むしろその尊い動機を根底から奪い、いたずらに抵抗のみ生み出すことになる。

なべて心ある指導者となり、指導対象者の人格・人権を尊び、友愛・親和的指導に徹して一定の業績を上げ、向後も、水面下では頻繁に起こり得るであろう体罰教育に勝る成果を上げて、体罰教育の出る杭を打たねばならない。ただし、これは、昨今の甘え根性なきにしもあらずの対象者を相手にしては、安易に体罰を与えて一定の成果を上げるよりも一層困難で辛抱強さを要する、まさに言うに易く行うに難い難行であることは知っておくべきである。

少し持ち上げすぎになるかもしれぬが、女子サッカーなどでシジャパン、人間的にも素晴らしい資質を持った選手と監督

の人間的人格闘が生んだよき事例と思われる。以上の認識を持って、すべての教育・指導者が事に当たれば、体罰根絶の茨の道も少しずつ少しずつ切り開かれていくだろう。

(13・2・02)

ネット訪問者の拍手

(7) 拝啓、ワンウェイ・みずほ銀行殿

いやはや、驚き、桃の木、山椒の木である。今時、こんな人たち、いや、こんな組織? って、あるのかなあ、と。

一年ほど前のこと、さる病院内でクレジットカードとキャッシュカードを詰め込んだ財布を無くしたと思い込み、いくつもの銀行、カード会社に大慌てに電話連絡、あげく住居地を管轄する警察にも駆け込むなど、大騒ぎをした。が、その日のうちに思い違いだったことが分かり、

今度もまた大慌てに各銀行、カード会社に電話連絡したが、各銀行・カード各会

社から、即座にカード発見届けの提出書類が送られてきて、署名捺印してそれを返送、あとは変わりなくそのまま各種カードが使えて、たちまち一件落着いた(と思いついでいた)。ところがその後一年経つうちに、なにやらある銀行(みずほ銀行)のカードだけが使えないものにならず、都度にATMで「このカードは使用できません」と表示され、現金が下ろせないことが分かった。出かけた際に金子が不足し、帰りの交通費を調達するのに弱り果てたこともあった。そこで過日、確定申告のため八王子税務署に行くついでに、発行元のみずほ銀行八王子支店に赴いたのだが、それが即ち、驚き、桃の木、山椒の木なのであった。

現金のおろしついでに仔細を伝えてカードを窓口嬢に渡したところ、何のことはない、カードは「紛失届があったので、使用停止処分になっている」という。こ

かったのか、あるいは私がその発見通知の書類を送り返さなかったのか、なにが事故や支障があつて、カードが使用停止処分のままになつていたと思えば済むことである。が、以下のいきさつには全く恐れ入るほかはない。感情・評価を交えず事実のみ記すと、次の如くである。

「では、カードを使用できるように変更してください」
「分かりました。でも、すぐにはできません、お客様がすべて終わりになるまでお待ちください」
「税務署に行かなければならないので、そんなに長く待たせません。」
「こちら忙しいので、来店の皆様への対応がすべて終わるまでは、どうしようもありません」
「では、カード発見届けというような書類があると思いますが、それをください。のちほど、郵送します」
「その書類はありますが、ご本人が来店して提出することになってるので、お

渡ししても意味がありません。だからお渡しいたしません」
「え?!」

来店客が多いせいで殺気立っているようにも感じられたので、ここはいったん引き下がり、帰宅してから適応な部署に電話で問い合わせることにした。しかし、殺気だっているのではないかという善意の臆測は全く外れ、それどころか、そして次には、心の底からびっくり仰天したのである。

翌日、みずほ銀行八王子支店に電話を入れ、応対に出た。お客様係Y嬢に前日のいきさつを話し、改めて、カード発見通知の書類を送つてくれるよう、丁寧に依頼した。ところがである。この担当者曰く、当行ではカード紛失・発見に関する取り扱いは、窓口嬢が説明した通りであり、従つて「カード発見通知書はこちらん送れない、身分を証明するものをもって来店した上で手続きされたい」とのことである。

私は、水を向けてみた。
「老齢で体調も悪く、家での仕事も重なつていて、外出は難しいのですが…」
「それなら、代理人を立てて、その人を寄越してください」
「代理人が居なかつたら、どうするのですか？」
「自分できてください」
「え? どうしてもこちらから行かなくてはならないのですか」
「そういうことです」

私は、切り札を出すことにした。
「でも、他の銀行やクレジット会社ではみんなカード発見通知の書類を送つてくれて、それを返送するだけで済んでいますが…」
しかし、ものの見事に当てが外れた。

「他のところのことは知りません。これは、私どもの規則です」
こつなつてはもう、引き下がるより他に術はない。でもちよつと待て。今一度、今度はちよつぱり底意地を持って、言つ

てみた。

「こちら、八王子支店まで出かけることはほんとに難しい。そちらから我が家にやつてきて手続きをしてくれることはできませんか。ほんとに、出かけることは難しいのです」

相手はきつと張り詰めた調子で応えた。
「そんなこと、できません。こちら忙しくてお客さまのところなど、訪ねる時間なんて全くありません」

こつなると、こちらも段々怒りも顕わになり、底意地もますます悪くなる。
「そうですか。何年前か前、投資信託を売りに来たときは、課長さんが女性社員を連れて訪ねてきたけど、まあいいか。それでは、その投資信託の毎月配当金もカードがなくて近頃のATMでも下ろせないの、他の銀行に振り込んでもらうようにしたいのですが、その手続きはどうしたらよいですか」
相手は一瞬考え込む風情を感じさせたが、すぐに毅然として言ってきた。

「そんなことはできません。配当金はすべて当行の預金通帳に振り込む規則になつています!」

ああ、何をか言わんや。この相手、この銀行? まるで、こちらの望むことは何でもかでも一切拒むことを喜びとしているやにも見える。呆れもし、怒りもし、こつなつては怒声となつて、最後の締めをするしかない。

「それでは、何が何でもそちらに行かなくてはいけないと言つことだね」
突然変容したこちらの剣幕に押されたのか、相手がひるんで、返事がない。今度は、思わず怒声に満ちた言葉になった。
「返事をしなさい!、ハイといいなさい!」
「……」

「返事をしなさい!」
まだ、返事がない。
「そつというやり方が正しいというなら、きちんと返事をしなさい!」
一瞬間を置いてから、「はい」と応え

るか細い声が届いた。
その後、半年が経つた。が、みずほ銀行八王子支店からは、もちろん、何の連絡も無く、外出時に携帯するキャッシュカードは、コンビニその他、どここのATMでも手数料無料の新生銀行のそれに替えた。

他の銀行やカード発行会社と同じようにはできないという、即ち、銀行に赴かない限りカード使用の手続きはできないというこの銀行の有り様、老齢で病苦を抱える私にとつては、とりわけ意地悪な対応である。が、よくよく辺りを見回してみれば、それは格別珍しい対応でもない。昨今の世の中、およそいじめ、意地悪など、パワハラ行為に満ちあふれているからである。パワハラとは、大上段に振りかぶつて言えば、「教育・指導・医療、あるいは行政・営利・サービスなど、あらゆる人間関係のさまざまな関係性のなかで、優位な立場に立つ側が物理的・

心理的・経済的、そのほか様々な側面で相手を害する行為、要するに、相手を困らせ、弱らせ、いたぶる行為であるが、今や、こうした小さなパワハラから大きな組織体のなかで行われる「退職追い落としパワハラ」まで、あちらでもこちらでも多種多様、まさに平成パワハラ時代である。こうした世相が子どもの世界にも浸透し、陰湿ないじめによる被害者の自死事件も珍しくなくなり、社会人の適応・精神障害も増え続けている。力弱い者は、怒りを発散する術さえ持てず、屈辱のなかで、世を嘆き、恨み、ひたすらじっと堪えるほかはない…。政府は、アベノミクスで世の中変わった、明るくなったと調子よく景気回復をぶち上げているが、実は暗きくらい陰湿な世界はなお厳然と存在している。折しも、TBSの最近のテレビドラマ「半沢直樹」、

やられたら倍返し十倍返しでやり返す、という痛快なテーマが視聴者の絶大な共感と支持を得て大ヒット。この現象こそ、

この世の中に、向けどころのない鬱積した怒りや怨念を抱え込む限りない数のパワハラ被害者がいることを、痛いほど如実に示すものである。

さて、評論家ぶつた話は措いて、このような不快な体験をすると、人様からの善意や好意がことさらに嬉しく感じられるようになるからまことに不思議、以前なら軽く受け流してきた、誰でも経験するであろうような他者からの何気ない様々な行為が、深く心に沁み入り、人間としてのいいなあ、世の中っていいなあ、とシミじみ心温まる気持ちに浸らせてくれる。悪い奴よりよい人の方が、実は圧倒的に多いのである。

代々木・NHKホール

月に一度、代々木のNHKホールにN響（NHK交響楽団）の演奏を聴きに行く。その休憩時間に、妻はワインを1グラス、私は冷水のボトルを1本求めてのどを潤すのが常なのだが、ある時あまりの乾きに、売店の売り子嬢に、思わず

言ってしまった。
「ボトルがもつと冷えているといいんですが」。

私の後にはまだたくさんのお客が並んでいた。「これしかないんです」と逃れてもいいところなのに、彼女はすかさず「あ、そうですよね。冷蔵庫のものに取り替えます」と言って、いったん渡したボトルをカウンターの冷却ボックスに戻して瞬時に走り、一段と冷えたボトルを持ってきてくれた。

若者の謙讓心

つい先頃まで、電車に乗るのが怖かった。何故って、座るところがなくてつり革にぶら下がると、たちまち、若い男性、時には妙齢の若い女性からも席を譲られてしまうからである。申し訳なくて、照れくさくて、だから、若い人たちにはなるべく離れるようにして、入り口付近などにも、よく体を委ねたりしていた。

それにしても、不思議である、つい何年前か前までは、こちらがどんなに疲弊し

ていても、優先席に座している若者達からささ席など譲ってもらった記憶はさらさら無く、「今時の若者ってやつは」と憤慨していたものだった。それがいつの間にか、こちらが気を遣うほど様変わりしている。何故だろう？ 思えばしかし、

理由は実に簡単だった。それは、私がいちたわってやらねばならないと感じさせるほどの、いつわりのない高齢者になったからである。

自分で言うのもおこがましいが、私は長い間、実年齢よりもずっと若く見させる「若さ」があった。それが3年前、心臓の病が顕在化し、以後、急速に心身が衰え、今や頭も薄くて白く、そしてやつれさえ目立ち、すっかり年並みの高齢者になった。偽りのない、己の姿である。

過日、某新聞のコラム欄で、ある新聞記者が、例によって例の如く、「昨今の若者は…」と嘆いていた。が、よくよく思えば、それは明らかに間違っている。今も昔も、若者達は、高齢者の実態に合

わせ、見事にそれに対応している。妙な謙讓は無礼に当たるとして元気な老人には特に区別せず、だが疲れた老人にはいたわりの心を持った謙讓の精神で接しているのだ。

まだ席を譲ってもらわなくても済むやに判断された老人は、心して喜び、席を譲られた老人は、改めて若者の謙讓心に感謝し、それに身を委せればよい。思い返してからの昨今の私は、臆することなく若者たちからの好意を受け、また、そうした好意が見られないときには、壮健に見られているのだなあ、とそれはそれなりの元気をもらっているのである。

若者達から、席を譲られるたび、身も心も癒やされる。新宿まで出かけた昨日が1回、今日は電車に乗る前のバスで1回、席を譲られた。譲られるたび、若者万歳！ 未来の日本をよろしく、と心で叫ぶ。幸せな感情がふつふつと湧き起こり、暗澹たるなか、日本の将来を確信する時である。

江戸東京博物館

フラインバーグ・コレクション展「江戸絵画の奇跡」を鑑賞がてら、八王子から両国まで、江戸東京博物館に二日続けて行ってきた。何故二日も続けて行ったのか？ もちろん、一日では十分な鑑賞ができず心残りがあったからだ。が、もしかして、そこで働く若い女性達の対応が何とも嬉しかったから…？

65歳以上は割引料金ということは知らなかった。いかにも無念、受付で言ってみた。「立派な後期高齢者です。喜寿を迎えています。この顔パスではいけませんか？」。

受付嬢は「ふつと微笑って、「分かりました。でもお顔の色つやからはとてもそんなには見えませんが…」

かつて長野の梅池スキー場や倉敷の原美術館でも同じようなことがあったことを思い出し、何か浮き浮きと入館した。その気分は帰る頃にもまだ続いて、土産店で解説書や絵はがきの他、買わなくて

かった話である。

『ソーシャルケースワークと権威』という英書の翻訳・編集作業が半年にもわたって疲れ果てた。久しぶりに訪ねてきた娘が、疲弊した姿を見て心配し、飛行機代を負担するから、沖縄でも北海道でも、どこかのんびり旅行に行つてこいと言つ。これ幸いと早速、一度は行つてみたいと思つていた対馬旅行を企てた。全日空機で羽田から長崎に飛んでそこで1泊、翌日また飛行機で対馬へと飛び立つ、付き添い(妻)付き慰安旅行である。

ところが何とということ、出立の朝、家を出るのが遅れ、予定の飛行機に乗れなくなった。飛行場には手続きその他で出発予定時間より少なくとも30分前には着いていなければならぬが、何を勘違いしたのか、私たち二人はちょうどその出発時間に着くようにしか家を出ていなかったのである。これでは、飛行場受付に到着した時、予定の飛行機はまさに空港を飛び立っているわけで、とつてい乗

ることはできない。中央線電車が新宿駅に届く頃、私たちは突然このことに気づいて愕然とした。が、もう遅い。

あれこれ思案した。ANAの11時15分発の次はたしか16時30分頃だったはずだが、5時間も飛行場で待つなんて大変だ。長崎市内見物もできなくなって、長崎宿泊が無駄になる。それなら飛行場でJALや格安航空会社のチケットを探してみるか。もし、早いチケットが見つからなければ、今日は娘の所に泊まって長崎のホテルはキャンセルし、明日の便で対馬に直行……。あれやこれや思案するうち、ふっと乗り遅れた2枚のチケットがどうなるのか不安になった。これまで、国内旅行も海外旅行も出発時間に遅れたことは一度も無く、このようなとき、チケットの取り扱いはどうなるのか、全く知るところではない。後便に変えるとか、他社の便で行くなどといっても、まずはこのことが大切だ……。

不愉快極まるみずほ銀行とのやりとり

これでは時間が無駄にどんどん経つて、チケットの変更や払い戻しもしてもらえなくなるのではないかと、とたちまちいららと不安も募ってきた時、近くを急ぎ足のANA制服嬢が通りかかった。救いを求めるような思いで私は彼女を呼び止

め、先程と同じ説明をして、このまま並んでいて何とかなるのだろうかと言いついてみた。すると彼女は、「もう出発時刻ですから間に合いませんが、でも、出発時間内には到着されているのですよね」と何か含みのある言葉を残して、「しばらくお待ちください」と受付カウンターの中に入つていった。そして、すぐ立ち戻つてきて、実に親切な処理をしてくれた。

「ANAの便ではないのですが、16時台までお待ちにならなくても、2時間後に出発する共同運航便がございます。もし、それでよろしければ……」

共同運航便という言葉は初めて聞いたが、乗れる便があるとは、もちろん渡り

に船の話である。彼女は早速私たちをチエックインカウンターの別の場所に導き、たちまちすべての手続きを終えてくれた。「出発は13時15分。ではお食事などして遅れませぬように30分前までには*番搭乗口からお入りくださいませ」

彼女は丁寧に辞儀をしてから、所用を抱えていたのか、また急ぎ足でそそくさと他の場所へ移つていった。「ドナ」で働いている人たちにも似て面差しが柔らかい。地獄で仏に会つたような救われたという感慨があつた。

心穏やかな豊かな気分の旅行になった。長崎には、まだ十分明るいうちに着き、海岸線に沿つて、潮風の香りに身を委ねながら、木々の緑と建物が美しく調和する小高い丘の風景を眺め歩いた。対馬では、日本の田舎でも失われつつある純朴な人情に心奪われながら、とりわけ日朝交流の古跡見物を楽しんだ。

観光客は少なくないが、対馬ではほとんどが韓国の人たちで、東京から2泊3

が頭をよぎる。「搭乗時間に遅れたのだから、チケットは無効になるだけだ」と強面に言つて鬼のようなANA職員の顔が浮かんで来た。とにかく予約機の出発時刻以内には行かなくては……と、羽田空港駅に着いてからは、圧痛の胸を押さえ押さえ、走り走った。しかし、どこにもよき人はいるもの、案ずるより産むが易し、の嬉しい結果とはなつた。

飛行場について、ANAのカウンターに急いだ。いろいろなカウンターがあつてどこに行けば適当なのかよく分からな。とりあえず空いている所に行つて事情を説明すると、「もう、飛行機が出る時間だから、これには乗れません。*番カウンターに並んで処理してください」と何をどう処理するのか分からない、事務的すぎる返事。仕方なく*番カウンターに行つたが、そこはたかさんのチエックイン客が、10分や20分では順番が回つてこない、まさに蛇列をなして並んでいるところだった。一旦並びはしたが、

日の日程で来たと言つと、誰も皆、「遠いところからよくぞまあ」と心からの歓迎の顔になる。対馬藩主宗家の墓所・万照院では島北部に住む老夫婦と出會つて家に誘われ、レストランを探しあぐねて通行人に道を訊くと、その人はずつと見守つていたのか、私たちが再び迷つた時、追いかけてきて店まで誘い、観光みやげ店の若い売り子嬢は「野生生物保護センターのツシマヤマメコを見てきましたか」と問い、しかし「残念ながら私はまだ見に行つたことはありませんけど」と打ち明けて微笑い、「東京からお出でになつたのですか、一度行つてみたいなあ」と純朴な気持ちを隠さない。

こうして、旅を満喫して対馬から長崎、羽田と同じ空路を戻り……、羽田の飛行場から地下を通つてモノレール駅に渡るうとした時、通路脇に陣取つたANA制服の2人の女性から声をかけられた。

「ANAカードはお持ちですか。ANAマイレージには入会されていますか」。

路上はおるか、電話による様々な勧誘にも乗ったことは一度もない。しかし、この時ばかりは別だった。一も二もなくそれに応じて申込書の説明を受け、それを家まで持ち帰った。

帰宅して、テレビをつけた途端、びっくりするようなみずほ銀行のコマーシャルが目飛び込んできた。初めて見るものだった。たかさんの女子行員達がこちらを向いて、「みずほは変わります。お客様の力になるために 未来へお客様とともに、ワンウェイミスホ」。

よくもまあ、このようなコマ シャルを...。「みずほ」に関わるものはすべて解約しようと、この時、決めた。

(13・8・20)